

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 李 衣雲

本論文は、旧日本植民地時代から戦後を経て、現在に至るまでの台湾における「日本」イメージの変遷をたどり、「哈日ブーム」が単なる一過性の現象ではなく、台湾における日本大衆文化の発展の累積による現象であることを明らかにするとともに、台湾人における「日本」という他者の動態的位置づけの変容を理論・実証の両面から明らかにしたものである。本論は以下の五章からなる構成をとる。

第一章では、台湾の哈日現象に関する日本、台湾における先行研究を紹介し、あわせて東アジアにおける台湾の哈日現象の特殊性に言及している。たとえば同じく日本の植民地支配を受けた韓国でも「日流ブーム」はあるが、対日イメージの向上には結びついていない。第二章では、1950年代以降の台湾の社会状況を背景として、日本大衆文化の台湾での発展を論じている。その時期、台湾では自国特有の大衆文化市場が停滞し、とくに歌曲、漫画、アニメ、ドラマ等の領域でアンダーグラウンドにおいて日本の大衆文化が発展した。第三章では、45年以降の「日本」イメージの変化を歴史的にたどっている。戦後、中国に対する「祖国」イメージは、外省人との衝突や1946年の228事件によって瓦解していく。一方で、植民地時代の「集合的記憶」がノスタルジックに日本に対する好意を増幅した。第四章では、潜在化した日本大衆文化の発展が累積し、総合的に「日本」イメージが独立したブランドに成長する過程を、記号論的考察も交えて論考している。終章の第五章では、90年代以降、台湾において日本大衆文化が、一種独特の文化資本を有するブランドとして構築されていった過程、その後、哈日ブームが沈静化し、日本文化が日常化する様相を分析している。

このように、本論文は、台湾における日本大衆文化の受容、とくに哈日現象を、植民地時代からの集合的記憶、戦後の国民党政府政策との軋轢、台湾固有の文化市場の停滞等、歴史や民衆心理の側面から多面的かつ深層に分け入って考察し、日本イメージの形成が累積的で台湾独自の複雑な歴史によるものであることを明らかにした意欲作である。これまで台湾の日本大衆文化研究は90年代以降のドラマの分析に片寄る傾向にあったが、本論文は時期を植民地時代にまでさかのぼり、また分析対象を漫画や歌曲にまで広げた。また、韓国を初めとする東アジア諸国との日本文化受容の差異についても歴史的経緯から明らかにしている。

植民地時代における「ハビトゥス (P.Broudieu)」形成過程の考察や「日本」という他者に対する意識変化を説明する理論的根拠付け、哈日現象沈静化以降の日本大衆文化の位置づけの考察等、今後、分析を深めるべき課題も多々残しているものの、本論文で示した成果と研究手法をさらに発展させるならば、当該研究領域において多大な功績を残すことになるだろう。そのために必要な視座と学識は、本論においてすでに十分披瀝されている。

よって、本審査委員会は、本論文が博士(社会情報学)の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断する。